

# 日本銃砲史学会の歴史

2010-03-03 16:03:03 collontei

当銃砲史学会は昭和36年(1961)10月7日に「日本古銃保存会」として発足した。創設期のひとり山田 太郎氏の研究(平成20年8月)「銃砲史研究360号」より抜粋すれば、以下のような前史があった。

## 1. 前史

1、社団法人「火兵学会」東京帝国大学工科大学 造兵学教室内 明治40年(1907)発足 学会誌「火兵学会誌」(Journal of the Society of Ordnance and Explosives)発表 同年、第1巻を刊行し、年6号を発売してきたが昭和19年(1944)休刊。

2、昭和4年(1929)予備役編入の有馬 成甫海軍大佐は国学院大学で歴史学を履修され、「科学知識」「史学雑誌」「水交社記事」などに軍事記事を投稿。

3、軍事史学会

4、昭和11年(1936)2月発足。会長有坂海軍造兵中将。有馬海軍予備役大佐主幹学会発表雑誌「軍事史研究」を年間6回発刊、昭和16年有馬大佐応召により同18年休刊。戦後、昭和37年(1962)国防史学会設立「国防史学」を刊行、昭和38年「軍事史研究」と改名。昭和40年「軍事史学会」と改称し、「国際軍事史学会」に加盟した。

5、戦後、有馬海軍予備役少将は「火砲の起源とその伝流」著作で文学博士号を取得。「蘭学資料研究」「日本歴史」「国防史学」などに軍事記事を投稿。

6、「日本古銃保存会」が発足。会長有馬 成甫氏、関東地区は国友宅、関西地区は吉岡宅を事務局とした。爾後昭和37年まで14回例会を開催した。同会が現在の当学会の元である。

## 2. 日本銃砲史学会

1、発足と経緯 昭和38年(1958)2月2日、「日本古銃保存会」第15回例会において「日本銃砲史学会」と改名した。



昭和43年(1968)8月8日、(社)日本ライフル射撃協会の内局として、会規則を制定し、例会は岸体育館で開催された。会報「銃砲史研究」第1号刊行、以後毎年1月、8月を除き年間10回の例会を開催し、会報を発行した。

平成17年年度、ライフル射撃協会の財政面、事務面分の理由により独立した団体として現在に至る。平成21年2月、英文名称を(Firearms Historical Academy of Japan)とした。論文は元防衛大学教授中原 正二博士の監修により編集されている。

現在の活動は、年4回の例会、1回の見学会を実施し、論文集「銃砲史研究」は365号を数え、論文は900近くにのぼる。会場は早稲田大学理工学部各務記念材料技術研究所を使用させていただいている。材料工学研究発表も多く見られ、外部の方の発表もある。

見学会は事務局長峯田 元治氏が幹事し、設楽原古戦場、国友町鉄砲鍛冶、葦山反射炉、陸上自衛隊武器学校・野田市博物館、横浜開港博物館などに過去各年、実施した。

貴重な先人たちの研究、論文をデジタル化し永久に保存すべく、また会の活動を広く告知するために、平成22年3月当[www.fhaj.jp](http://www.fhaj.jp)を開設した。

現在の会長は(社)日本ライフル射撃協会会長坂本剛二、平成22年4月より理事長に宇田川武久氏が就任する。

## 3. 会の創設者たち

1、初代会長、有馬 成甫博士は戦前より一貫しての銃砲史研究者であり、著書に「一貫斎国友藤兵衛伝」「北条 氏長とその兵学」「朝鮮水軍史」「高島 秋帆」「火砲の起源とその伝流」などを数え、日本の名実ともに銃砲史研究の一人者であられ、会の創立、成長に大いに貢献した。昭和48年(1973)8月没。

2、第2代会長、安齋 實氏は明治大学法学部在学中より射撃を始め、さらに日本の火縄銃関連の資料収集と研究を重ねられた。「日本前装銃射撃連盟」の創設にも関わり、オリンピックの射撃監督を重ね、(社)日本ライフル射撃協会会長であられた。著作に「砲術図説」「砲術家の生活」「わが鉄砲人生とオリンピック」がある。平成9年(1997)12月没。



安斎實会長（左）と岩堂憲人理事 昭和44年（1969）野田城址見学会

3、第3代理事長、所 莊吉氏 「図解古銃事典」の著者であり、日本の古銃研究のパイオニアの一人であられた。多くの研究を発表され、論文を書かれた。特に幕末の日本の西洋流兵法導入期の資料と研究は国立歴史民俗博物館に収納されている。「火縄銃」「中島流砲術管闕録」などの著作あり。平成17年（2005）没。



平成20年板橋区立資料館の展示ポスターより

そのほか、創設時は吉岡新一氏（京都）、赤羽通道氏（東京）などの古銃・関係資料の収集・研究家が多く参加され、また発足時には日ラの事務局からは多大なる事務的援助をいただいた。